

巻頭言

「街道をゆく」の音読

理事長 新谷友良

司馬遼太郎の「街道をゆく」の音読が、第24巻「近江散歩・奈良散歩」まで進みました。全部で43巻、3年にしてようやく道半ばです。気が向いたときに、週刊誌連載時の1回分を声に出して読んで、15分ぐらいかかります。

聞こえなくなる前に全巻1回は読んでいますが、初めての文章という思いで、できるだけ正確に読むようにしています。「街道をゆく」は紀行文ですが、司馬遼太郎の興味を持つ部分がデフォルメされ、時空を超えて行き交うので、紀行文というより一つの物語を読むような印象があります。使われている言葉に学术论文のような厳密な考証も付け加わって、音読には困難な言葉が多く出てきます。カムヤマトイワレヒコ（神武天皇）はまだ大丈夫ですが、イワオシワクノコ（石押分之子）となると読みきれない、聞ききれない言葉で、何回か言い直しが出てきます。

もう死語になりつつありますが、「素読（そどく）」という言葉があります。素読と音読は少し違って、「素読と音読には、文章の意味を理解しているかしていないかの違いがあります。音読は、文章の意味を理解しながら読む必要があるので素読とは違っています。」と津田塾大学の大原悦子さんが説明しています。小学校の国語の時間、よくクラス全員で教科書の文章を読まされましたが、皆がスラスラ読むので意味が分からないまま、がむしゃらについていった、あれは「素読」だったと思っています。

以前の巻頭言で、聞くことと話すことについて書いたことがありますが、文章を声に出して丁寧に読んでいくと、今まで読み過ぎていた多くのことに気づきます。

誤った読み方に気づくのは日常茶飯事ですが、初めの部分をゆっくり丁寧に読み、少し呼吸を入れて、最後の文章をしっかり締めくくると、書いた人の思いに近づける気がします。

音読をした後に記憶力のテストをすると、記憶力が2、3割上がり、音読を毎日継続すると、1カ月後には記憶力が3割上がるという記事がホームページに出ていましたが、記憶を高めるものは声そのものがもたらす力、リズムではないかと考えています。小学校の国語の時間は、聞いて話す、話して聞くという言葉のリズムを身に着ける大切な訓練の時間だったと今は思っています。